

「鉄のあけぼの」を 求めて

—高度成長の扉を開いた西山弥太郎の人と生涯—

神戸を本拠に鉄一筋に打ち込み、平炉メーカーだった川崎製鉄（現JFEホールディングス）を、千葉市、岡山県倉敷市での高炉建設で鉄鋼一貫メーカーに飛躍させた。川崎製鉄初代社長、西山弥太郎。敗戦国・日本に最新鋭の臨海型一貫製鉄所を建設し、「奇跡」と称された高度経済成長の扉を開いた。「これから目指すのは貿易立国だ。そこで何を売ればよいか。鉄だ。我々は迷うことなく製鉄業の立て直しに邁進しなげりやならん。われわれ日本人は『故郷のあるユダヤ人』になろうじゃないか」（黒木亮『鉄のあけぼの』）。兵庫・神戸に流れる起業家精神のDNAがそこにある。2002年、ライバルのNKKと統合し、JFEとなった今も、洞察力とものづくりへの情熱に満ちた西山の魂は、先行き不透明な現代にあってまぶしく映る。50回忌を迎えた今年、千葉、神戸、東京など各地に刻まれた足跡をたどってみよう。

（神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員・加藤正文）



千葉埋立工事の打ち合わせをする西山弥太郎（左から2人目）
=1951年5月



水島製鉄所建設現場で指揮をとる西山弥太郎=1962年9月

シンボル

小さな穴からオレンジ色に輝く「お湯」が流れていく。1500度。まばゆい光、体に伝わる熱。生まれたばかりの「命」の輝きに圧倒される。

千葉市のJFEスチール東日本製鉄所千葉地区。高くそびえる高炉は24時間休むことなく鉄を生み出している。高炉はしばしば母胎になぞらえられる。鉄鉱石とコークスを層状に入れ、熱風を送り込む。どんなに技術が進んでも、胎内で化学反応を起こすという原理は変わらない。高炉は鉄ができる工程の序章だ。その後、精錬や鋳造、圧延などを経て、暮らしを支える「鉄鋼」になっていく。

ここ千葉の地で西山は熱き鉄のドラマを夢見た。第1高炉の火入れは1953年。半世紀以上、産業の火をともし続けてきたのだ。いまもここでできる自動車の薄板は主要メーカーに納められる。

製鉄所の一角に「西山弥太郎・千葉歴史記念館」がある。入口には巨大な銅像。現場の安定稼働と高品質の維持をたえず見据えているようだ。中には西山の「人と生涯」が分かりやすく展示されている。英語で丁寧に書かれた東京帝大の卒業論文や社員にあてた手紙、子供と向き合うやさしい人柄をしのばせる写真、手帳など数々の遺品…。

この卒業論文は学生の域をはるかに超えている。新しい工場を提案する中で資金調達から設備・原料の選定や収益計画まで盛り込んだ優れた内容だ。経営者になってからは、巨額の資金をねん出するため、時の日本銀行総裁を説得

し、世界銀行にもかけあい、第一次借款として当時の金額で70億円も調達した。

1995年の阪神・淡路大震災で被災した旧川鉄の神戸本社や葺合工場はすでになく、神戸にあった西山記念館は2012年、老朽化のために取り壊された。それだけに千葉に移された遺品の数々から、神戸がはぐくんだった一人の経営者の生きた証が胸にしみる。

「鉄のあけぼの」

国際金融小説の名手、黒木亮（58）は西山の人と生涯を追い、2012年に著書「鉄のあけぼの」（毎日新聞社刊）を出した。徹底した取材には定評がある。遺族やOBに話を聞き、現場に赴く。製鉄所は言うまでもなく、巨額の融資を受けたワシントンの世界銀行、食事をしたレストラン、亡くなった神戸の病院にまで足を運んだ。

「一人一人の心の中に西山さんが色濃く生きており、エピソードが山のように出てきた。世銀のアーカイブでたくさんの手紙を見つけたのですが、いとおしくて直筆のサインをなでてきました」。著書を読んでいると、西山が現代によみがえり、生き生きと現場を駆けずり回る姿が目の前に浮かんでくる。

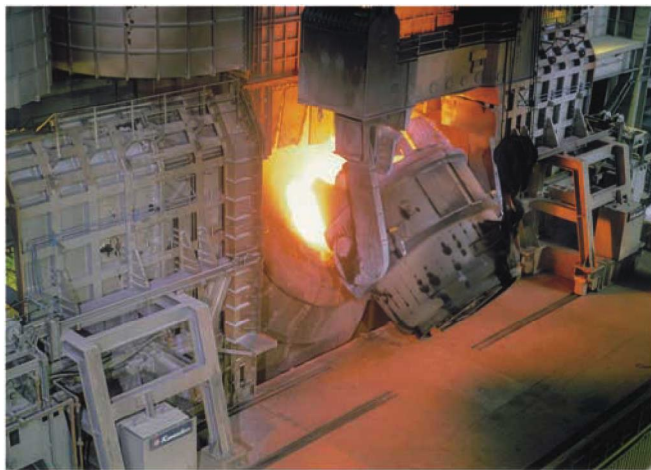
焼け跡の神戸。閑散としていた葺合工場の一隅で、西山が作業服姿の後輩藤本一郎（後の2代目社長）に話しかける場面は全編を貫くモチーフとなる。

「俺は、これから日本人は、『故郷のあるユダヤ人』を目指したらいと思っんだ」
またけつたいなこといい出すもんやなあと藤



「鉄のあけぼの」を書いた作家
黒木亮（神戸新聞社提供）

転炉で不純物を取り除き、加工しやすい「鋼」に造り変える＝JFEスチール東日本製鉄所千葉地区



本は思う。

「貿易立国しかない。では、何を売ればよいか？ 鉄だ。我々は、迷うことなく、製鉄業の立て直しに邁進しなけりゃならん」（作品から引用）

1950年、西山は川崎造船所（現川崎重工業）から分離独立した川崎製鉄の初代社長に就任。8月7日、葺合工場で創立記念式典が催された。

工場内はうだるような熱さだったが、分離独立の思いを遂げた西山の表情は晴ればれと涼しげだった。

「我々は川崎の伝統である誠実と敢闘の精神をもって、来るべき難局を克服するとともに、いよいよ社運の発展を図るべき覚悟を新たにしなければならぬと思うのであります」（同）

この「誠実と敢闘の精神」は西山の人生そのものだ。この後、待ちかねたように臨海型の鉄鋼一貫製鉄所の建設に動く。千葉製鉄所の建設である。当時、八幡、富士、日本鋼管の高炉3社が大きな力を持ち、川鉄、住友金属、神戸製鋼所の平炉3社を下にみる空気があった。川鉄の千葉製鉄所の建設は「暴挙」「二重投資」「製鉄所にべんべん草が生える」。批判の嵐の中、西山は不屈の魂で突き進んでいく。「夢をなくしちゃ、進歩がないぞ」

この作品に引き込まれるのは、黒木自身が西山の生き方にほれこんでいるからにはかならない。「書きながら何度も涙を流した」というだけに、行間に独特の熱気がこもる。現場に精通し、家族や社員を愛した西山のエピソードが全

編にあふれる。

葺合工場の平炉に異常が生じた際、工員が「弥太公呼んで来いよ！」と叫ぶと、「俺はここにおるぞ！」と言いながら、熱を帯びた煙道から這い出てくる。数々の逸話や発言から伝わってくるのは、私心なく鉄づくりに打ち込んだ見事な生き方だ。

黒木は言う。「日本でナンバー1の技術者が、工員と一緒に力仕事をやり、汗を流す。難事業の千葉製鉄所の建設だって、西山さんのことをみんなが好きだから理想に共鳴してついでいく。今の経営者にこんな人はいますか」「良いものを作ればそれで事足りりという人ではなく、常に世界情勢を理解し、将来を予測した上で決断していた。エコノミストであり国際政治学者であり哲学者でもあったように感じる。1980年代以降、経済がグローバル化し、ますます、単にものを作っているだけでは立ちゆかなくなつた。転換期にあるからこそ、西山的アプローチが必要になる」

川鉄とNKKの統合でJFEが生まれてから10年後の2012年、新日本製鉄と住友金属工業が合併し、「新日鉄住金」が生まれた。鉄鋼業界は世界競争の渦に巻き込まれ、今も激動のさなかにある。「転換期だからこそ、先を読み信じた道を歩んだ西山さんが輝いて見える」。黒木は愛惜の表情を見せた。

薫陶

川崎製鉄社長、JFEホールディングス社長を歴任し、現在は東京電力会長を務める数士文夫（74）は、入社した1964年、社長だった西山弥太郎の訓示を聞いた。「書を読み、異分



さまざまな板に加工していく圧延。鉄の結晶組織も変化させ強度や加工性を高めていく＝JFEスチール西日本製鉄所倉敷地区

「鉄のあけぼの」を求めて

—高度成長の扉を開いた西山弥太郎の人と生涯—



西山 弥太郎（にしやま・やたろう、1893～1966）。神奈川県生まれ。東大工学部冶金学科卒。19（大正8）年川崎造船所（現川崎重工業）。50年、川重から分離独立した川崎製鉄の初代社長に就任。53年千葉製鉄所第1高炉火入れ。66年、73歳で死去。翌年4月、岡山県の水島製鉄所第1高炉火入れ。（神戸新聞社提供）



西山弥太郎・千葉歴史記念館 西山弥太郎の生涯と東日本製鉄所の歴史を紹介している。千葉市中央区川崎町1。午前9時～午後4時。土、日、祝日休み。無料。☎043・262・2205（撮影・加藤正文）



鉄にかけた西山の人生を話す数土丈夫（撮影・加藤正文）

野の人とつきあえ」と説いた。その表情を思い返しながらこう話す。

「失われた20年といわれるが、私たちは新しい価値を生み出す創造力を無くしてしまった。

西山さんがすごいのは、実現までのハウ・トゥー・ドウ、どうやるかをつかんでいたことだ」

「江戸時代末期、戦争前、バブル経済の後など、成功体験へのこだわりを背景に社会の同質性、均質性が高まり、異文化を排除する傾向があった。西山、松方（幸次郎＝川崎造船所社長）、鈴木（ヨネ＝鈴木商店主人）は積極的に異文化、異国の習慣を取り入れている。当社の前身である川鉄とNKKは、社風がまったく違った。異質な文化を融合させることに成功したのは、神戸にある進取の気質が背景にあったように思う」（2011年、西山記念会館シンポジウム）

西山を敬愛する数土は毎年、横浜の総持寺に

ある西山の墓に参る。「誠実と敢闘」。西山が終生大切にされたこの精神を、原発事故後に再建を託された東電の経営に当たりながらしばしば思い返すという。

創造の「培地」

時代に挑み、新しい価値観を生み出す。これは兵庫・神戸の風土に刻まれたDNAだった。作家の城山三郎も「もともと原始的な形で資本主義が生まれたところ。だからクリエイティブな人材を輩出できた」と評価していた。

幾多の経営者を生み出した創造の「培地」は健在なのだろうか。

西山の没後半世紀。次男の西山武夫（79）に会った。家族を愛した優しい父が最期に息子に話したのは「日本一の男になれよ」。いまはまだ、その気骨がひたすらまぶしい。（敬称略）



西山弥太郎の次男西山武夫夫妻（右2人）、左は姪の大園勢津子＝東京都杉並区（撮影・加藤正文）